

ひまわりからの

メッセージ

5 5 号

2015. 11. 9.

西濃園城
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

静寂に包まれて



昨夜、私は、高岡健先生の「希望が丘子ども医療福祉センター」長・発達精神医学研究所所長就任記念祝賀会に出席させて頂いたいただきました。

出席者の多くは、県内外の精神科の先生方で、実は私は非常に場違いな席にうかがったことを思い知ったのですが、いかわりニツクの井川院長のご配慮で学びの場をいただいたのだと思いました。

祝宴の半ばで高岡健先生のご講話があり、壇上に立たれた先生は、まずフロイトのことばに触れて、第一次世界大戦中、人々が集まると多数派を作るとき、あるいは

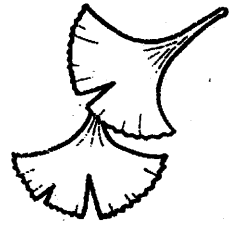
何百万人という集団ができるとき、個々人の道徳的獲得物がことごとく失われ、もっとも古い、粗野な心的態度のみが残ったかのようになる」と述べたこと、戦時下のPTSDの問題、さらには現在の状況にもふれて、精神科医としてのどの様に対処していくべきかという問題提起をされていました。もちろん、それは精神科の医師だけの問題ではなく、私たち一人ひとりとっても大きな問題を含んでいると思いました。

しかし、何より私が驚いたのは、高岡先生のお話の間中、静まりかえった会場に、もちろん私語などあるはずもなく、食器の音一つしなかったことでした。私も長く生きてきましたから、色々な職業の方の会に出席させて頂いたと思いますが、精神科のお医者様かには、日頃から患者の声をじっくりと聴くお立場にあるからなのでしょうが、さすがと思いました。主賓の講話に対する態度としてというよりも、人としての心の豊かさを感じたのでした。

そして、遠い昔、国立秩父学園でおつかえした精神科医であられた菅修園長の姿が不意によみがえり、初心にかえって襟をただしていこうと思ったことでした。

実践の中で

学ぶこと



昔、特別支援教育と言われる前、障がいをもつ子どもたちに対する教育は、特殊教育と言われていました。それが特別支援教育と名を変え、「一人ひとりの教育的ニーズ」ということが使われ、個別の指導計画や教育支援計画を保護者と共に作成を勧められるようになりました。

時代の移り変わりに身を置きながら、原点は常に変わらない。「目の前の子ども」であると思うのですが、世の中が便利になって、生活の中で学ぶことが少なくなり、教材も市販のものがふえて、子どもにかかわる私たちが、余り考えなくてもよくなってしまうのではないかと……と感ずることがふえました。

そんな中、二つの研究会で実践を見せてもらいました。

手作りの教材



一つは、古巣であるひまわり学園の指導方法研究会です。

以前、学園は脳性まひなど手足の不自由さをもつ子どもたちの学園でしたので、布教材がたくさんありました。紙で作った絵カードも、まひのある子が筋緊張のためにぎゅっと握って、くしゃくしゃにしまったことがありました。その時に、その子が見せた申し訳なさそうな悲しそうな表情がとて辛くて、カマカセに握っても元に戻る教材は何か……と考えた結果生まれたのがマジックテープをつけた布教材でした。

その後も、手作り教材は、学園職員が、自分が担任した子どもに向き合い、その子の発達をとらえ、今、その子に何が必要なのかを考えて作ってきました。言ってみれば教材づくりは、担任と、その子との真剣勝負です。いかに子どもに興味をもたせるか、いかにその子と共有の世界が作れるか、担任としては常に自分を試される

わけですから、私など、何度失敗したかしれません。大がかりな物を作ってみたこともありましたが、子どもの反応で自分の失敗を悟りました。子どもに「ごめんなさい」ですが、それは又、次の子どもとのかかわりの中に生かしていけばいいことだと思ひ直すしかありません。

さて、指導方法研究会では、絵本に興味が少なく、注意力も散漫になってしまふ、小グループの子どもたちに手作り絵本が登場しました。大きなお話しのお話ですが登場人物も子どもたちやお母さんにし、子どもたちに注意を向けさせ、立体的に操作する場面もあつて、最後まで飽きさせませんでした。担任の先生がどの位の時間をかけて作られたのかわかりませんが、まずは、指導のねりいは達成できたと言えます。さて、次のステップは、どんな工夫がなされるのでしょうか。今から楽しみです。

この教材が成功したのは、日頃子どもにかかわっている担当者、つまり子どもの実態を把握していたからできたことですが、教材づくりに多くの人の手が入ると、まちがった方向に向いてしまうこともあります。アドバイザーも取り入れに結果、子どもとのかかわりが上手くないかな、

たということも起ります。その時、その教材をつくらたことの責任は、どこかあいまいになり、担当者の反省として次のステップにつながるものが難しくなります。

目の前のその子どもとしっかり向き合う中でしか、その子どもに合った教材は生まれない、だからこそ真剣勝負だと思ふのです。ネット上で教材が難なく手に入る時代ですが、手作り教材には、子どもに対する深い思いがこめられているのだと再認識した研究会でした。



さて、二つ目の研究会は興文小学校の中間研究会でした。私は発達通級と言語通級を見せていただきました。発達通級（LD・ADHD通級）がほとんど開設されていますが、学級で何を学ぶのか、あいまいな部分もあるように思います。S・S・T（ソーシャルスキルトレーニング）といっても、本として出版されているS・S・Tの方法も順次とりに上げてやったところで果たして効果があるかどうか、疑問です。ここでも、まず児童の実態把握が大切なことは言うまでもありません。

二年生のAちゃんに対する授業は、まずAさんの「今の

等も確認するところから始まりました。つまり自己認識です。自分の得意なところと苦手なところを、作業、経験、体、情報、学習といった観点に分けて表が作られていました。それは今までの学習の中で積み上げられてきたものですが、それには幼児期からの家庭のあり方、保護者の方の子ども理解が大きくかかっていると思われました。

課題とめあてが次の確認です。めあては、本人の字で「自分のとくいな方をえらんでゲームにかつ」と書かれていました。ゲーム内容は、はたあげゲーム、パズルゲーム、あんきゲームの三つでしたが、いづれも対戦相手も自分で選び、ゲームの方法も二つの方法から選ぶというものでした。自己選択が成人しても難しい人もありますから、自己選択はとても大事です。Aさんは、研究会の参加者の中より自分が勝てそうな相手を見極めることは、さすがに難しかったようで「決められへん」と言っていました。それでも先生のアドバイスで「誰かやってくれる人はいませんか？」と声かけをし、手をあげて下さった方と対戦しました。

そして、振り返りでは、表情カードを使って自分の気持ちを選んでもとばで表現し、ゲームの方法については選んだ方法と選ばなかった方法について各々理由づけをし、自分が得意な方を選んだことを再確認していました。この授業でも、様々な手作り教材やアイテムが呈示されていましたが、後の言語通級でも、児童が構音指導のどの段階にいるのかが、視覚的に確認できるように、見通しをたてて学習に取り組める工夫がありました。また口腔内の模型を使って、今の自分の発音がどの様に舌を動かすことで作られた音だったか確認もしていました。

二つの研究会を見せていただいて思ったことは、先生方の子どもとのうながが的確であること。そして、子どもたちの今を大切にしながら見通しをもった指導がなされているということでした。ひまわり学園での療育は、将来Aくんのような自己認知へとつながっていくでしょうし、通級での指導は在籍学級と連携しながら集団の中で般化されていくことでしょう。もちろん課題はいっぱいありますが、まわりの子どもたちも巻き込みながら成長し

ていくことでしょう。

個別が個別だけで終わったのでは、子どもたちの社会性は育っていきません。「支援員をつければ通常学級の中でやっていきます」という保護者もおられるようですが……？、自分の子をよく知ること、そして学校と協力していくこと。学校の方も校内のチームワークがどうして必要でしょう。

その勉強法、うちの子向き？

(1/4付 朝日新聞より)



実は朝日新聞の家庭欄にこんな見出しの記事が
出ました。お気づきでしたか？

認知特性に関しては、何度も書いてきたと思いますが、
新聞記事として一般の人たちの目にもふれるよう
になったんだなというのが私の印象でした。

特別支援教育が始まって10の子どもたちが少しず
つ注目を集めるようになってきたり、自閉スペクトラ
ム症の子どもたちの特性が知られるようになってきて

学校現場でも子どもの認知特性が注目されるよ
うになってきています。

記事は、小児神経専門の本田真美医師の話
として、認知特性を言語優位、視覚優位、聴覚
優位の三つのタイプに分けて説明していましたが、普
段、学校の授業は話す、聞くが中心ですから、視覚優
位の子にとっては、とても難しいわけです。

漢字をくり返し練習しても覚えられないとか、九九
が覚えられないなど、今まで努力不足だと思われて
いた子どもたちが、実は本人の認知特性にそった学
習法ではなかったために困っていたのだということが、
だんだん分かってきています。

特別支援教育士の村井敏宏さんは、私も講座に参
加させていただいたことがありますが、明治図書から
可読み書きが苦手な子どもへの漢字支援ワークとい
うのを出しておられて、漢字にしろんという練習法
を紹介しておられます。

例 イ + 又 + 土 □ ↓ 径

サ + ハ + 木 □ ↓ 菜

新聞には書かれていませんでしたが、漢字を分析してパズル形式で組み合わせたり、「へん」と「くり」をバラバラにして文字を合成してみたり、子どもたちが漢字は苦手と思わないように、様々な学び方の工夫が昨今行われています。

九九についても、ただ暗記するだけではなく、四角のタイルが徐々に増えていくのを視覚的に確かめながら学んでいく方法も紹介されていました。どんな覚え方が覚えやすいのかは、一人ひとり違うわけですから唯一この方法が正しいと決めつけないで工夫してあげられるといいのでしょうか。

私は物をおぼえる時、口でつぶやきながら体を動かして歩き回っています。皆さんはいかがでしょう。お子さんたちが、自分の得意な方法を早く見つけ出せるといいですね。

おそらく今後は、公教育の場でも様々な試みが行われていくのではないかと思います。確実に子どもたちの状況は変わってきています。東京では、認知特性に合わせて教え方を変える塾もあると記事にあ

りました。勉強がわからない、できないことから自己否定に走ってしまう子どもたちを救っていくことができるのかもしれません。



勉強のわからないさは、こうして解決していく方法が見い出されていきますが、心にかかるのは、やはり社会性ということです。嫌がられることは平気で言う、周りのことに注意がはうえない、自分の行動に対しての善悪の理解が育っていない気がする。気持ち切り替えられない等々、勉強ができればいい、という見過ごせないことがたくさんあります。いじめによる自殺もあとをたちません。

では、大人である私は、私たちはどうなのでしょう。メッセージを書きながら、子どもの困り感は大人にも責任があると考えているのですか……。

お知らせ



・十一月の例会は十四日です。
・十二月十五日に西濃コンシェルジュ主催の講演会があります。